

● アフリカ

対話と恋愛のすすめ

峯 陽一（みね・よういち）

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九六一年、熊本県
- ② 専門分野・地域……開発経済学、人間の安全保障、南アフリカと南部アフリカ諸国
- ③ 学歴……京都大学文学部（史学科）、京都大学大学院経済学研究科（世界経済論）
- ④ 職歴……中部大学国際関係学部講師、助教授、教授（三十一歳、一三年間、現地滞在による休職期間を含む）、ステレンボッシュ大学政治学科准教授（三六歳、三年間）、大阪大学人間科学研究科准教授（四四歳、四年間）。
- ⑤ 現地滞在経験……南アフリカに三年（上記、ステレンボッシュ大学教員として）。たとえ数日の滞在でも、年に一度は南アフリカに通うようにしている。
- ⑥ 研究方法……素人なりに参与観察やインタビューを繰り返して

返しているが、それを記録して論文を書くことはしていない。論文に使う一次資料は公文書、政策文書、統計など。予算があれば質問票調査。小説などの翻訳が好き。

⑦ 所属学会……日本アフリカ学会。人間の安全保障学会。日本平和学会。国際開発学会。

⑧ 研究上の画期……一九九四年。ルワンダの虐殺と、南アフリカでのマンデラ政権の成立。当時は南アフリカも内戦前夜だった。よく避けられたものだと思う。

⑨ 推薦図書……内田義彦『作品としての社会科学』（岩波書店、一九九二年）

メッセージ

「神とは何か」というのは問い自体が間違っているものであって、むしろ「人が『神とは何か』と問うのは何故か」を問わなければならない、という議論があった。まあそうかもしれないが、人々は一般的な文脈からではなく、それぞれの切実さがあってそれぞれの神を問うわけなので、問うことが誤りだといわれても困る。

地域研究にも似たところがあると思う。東アジアとは何か、東南アジアとは何か、アフリカとは何か、メコン・デルタをくくるものは何か、スワヒリ世界をくくるものは何か。既成の国民国家の枠を壊し、研究者がこのような問いを発し続けてきたことで、地域研究は実質的に進展してきた。

しかし、「地域研究とは何か」という問いは、一般的すぎるかもしれない。それはイスラム教、キリスト教、仏教、アニミズムなどの枠を超えて、人間にとって宗教とは何か、霊性とは何か、祈りとは何か、と問うているようなものだからだ。比較宗教学者が必要であるように、このような大きな問いを発する者もいないと困るのだが、誰でもやれるものではあるまい。

それより重要なのは、対話だろう。別のフィールドをもつ者と対話する。別のフィールドに行ってみる。そうやって自分の固有の問いが研ぎ澄まされ、必要に応じて問いの

フレームも大きくなっていくに違いない。私の拠点は南アフリカだが、アパルトヘイト時代は入国できなかったたので、周辺国（まずはナミビア）から南アフリカを見ていた。隣から見ると、大南国アフリカの抑圧的なパワーが身にしみる。今やっているのは南アフリカと隣国ジンバブエの政治制度の比較だが、ジンバブエをフィールドとする人たちと議論できるのが面白い。まあ、口だけなら何とでもいえるので、他の地域に関することでも文章を書いて読んでもらうのがいいだろう。

私自身は、高校時代は哲学を志し、学部では歴史学を学び、大学院では経済学を修め、教員になってからは国際関係学、政治学、社会学の教室に籍を置いてきた。ひたすら無節操な文系放浪生活である（妻には貞節ですが）。しかし、「どこにいても僕は地域研究者だから」と開き直ってしまうのは逃げていく気がして、自分が所属している教室の方法論をできるだけ身につけるように、不器用ながら努力してきたつもりである。そのうちに五〇代になって、さまざまな学問分野の癖や共通する壁が、それなりにわかってきた気がしている。若手の地域研究者の皆さん、地域研究者としてのアイデンティティを大切にしながら、特定の学問分野と本気で恋愛してみてください。